

応用数学・講義資料

第5回

(2024年10月30日(水)配信分)

基本的な例

今回は、簡単な関数に関するフーリエ級数の基本的な例を、個別にではなく、互いの関連性に注目しながら、見ていきましょう。

f_A は

$$f_A(x) = x \quad (-\pi < x \leq \pi)$$

を周期 2π で \mathbb{R} 全体に拡張した関数とします。(教科書 §1.2.2 の最初の f です。) 収束するかどうかの検討は後回しにして、とりあえず形式的に f_A のフーリエ級数 S_A を求めてみましょう。

f_A は不連続点 $x = m\pi$ (m : 奇数) を除けば奇関数なので、

$$a_k = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} x \cos kx dx = 0 \quad (k \in \mathbb{N} \cup \{0\})$$

が成り立ち、 S_A はフーリエ正弦級数になります。

今、

$$\begin{aligned} b_k &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} x \sin kx dx \\ &= \frac{1}{\pi} \left\{ \left[x \frac{-\cos kx}{k} \right]_{-\pi}^{\pi} - \int_{-\pi}^{\pi} \frac{-\cos kx}{k} dx \right\} \\ &= \frac{2(-1)^{k+1}}{k} \quad (k \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

より、 f_A の L^2 近似を与える n 次の三角多項式は、

$$\begin{aligned} S_{A_n}(x) &= \sum_{k=1}^n b_k \sin kx \\ &= \sum_{k=1}^n \frac{2(-1)^{k+1}}{k} \sin kx \quad (n \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

です。

ここで

$$\|f_A\|_2^2 = \int_{-\pi}^{\pi} x^2 dx = \left[\frac{x^3}{3} \right]_{-\pi}^{\pi} = \frac{2\pi^3}{3}$$

より、近似の誤差は

$$\begin{aligned} \epsilon_n &= \|f_A\|_2^2 - \|S_{A_n}\|_2^2 \\ &= \frac{2\pi^3}{3} - \pi \sum_{k=1}^n b_k^2 \\ &= \frac{2\pi^3}{3} - \pi \sum_{k=1}^n \frac{4}{k^2} \quad (n \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

で、これが $n \rightarrow \infty$ のとき 0 に収束すれば、 S_{A_n} は f_A に L^2 収束することになります。(このことは後で考えます。)

さて、ここで

$$\cos\left(k + \frac{1}{2}\right)x + \cos\left(k - \frac{1}{2}\right)x = 2 \cos kx \cos \frac{x}{2} \quad (k \in \mathbf{N})$$

より、

$$\begin{aligned} S_{A_n}'(x) &= \sum_{k=1}^n 2(-1)^{k+1} \cos kx \\ &= \sum_{k=1}^n (-1)^{k+1} \frac{\cos\left(k + \frac{1}{2}\right)x + \cos\left(k - \frac{1}{2}\right)x}{\cos \frac{x}{2}} \\ &= \frac{1}{\cos \frac{x}{2}} \left\{ \sum_{k=1}^n (-1)^{k+1} \cos\left(k + \frac{1}{2}\right)x + \sum_{k=1}^n (-1)^{k+1} \cos\left(k - \frac{1}{2}\right)x \right\} \\ &= 1 + (-1)^{n+1} \frac{\cos\left(n + \frac{1}{2}\right)x}{\cos \frac{x}{2}} \quad (n \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

なので、 $-\pi < x < \pi$ に対して

$$\begin{aligned} S_{A_n}(x) &= S_{A_n}(0) + \int_0^x S_{A_n}'(t) dt \\ &= 0 + x + (-1)^{n+1} \int_0^x \frac{\cos\left(n + \frac{1}{2}\right)t}{\cos \frac{t}{2}} dt \\ &= x + (-1)^{n+1} \int_0^x \frac{\cos nt \cos \frac{t}{2} - \sin nt \sin \frac{t}{2}}{\cos \frac{t}{2}} dt \\ &= x + (-1)^{n+1} \int_0^x \left(\cos nt - \sin nt \tan \frac{t}{2} \right) dt \\ &= x + \frac{(-1)^{n+1}}{n} \sin nx - (-1)^{n+1} \int_0^x \sin nt \tan \frac{t}{2} dt \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= x + \frac{(-1)^{n+1}}{n} \sin nx \\
&\quad - (-1)^{n+1} \left\{ \left[\frac{-\cos nt}{n} \tan \frac{t}{2} \right]_0^x - \int_0^x \frac{-\cos nt}{n} \frac{1}{2 \cos^2 \frac{t}{2}} dt \right\} \\
&= x + \frac{(-1)^{n+1}}{n} \sin nx \\
&\quad + \frac{(-1)^{n+1}}{n} \cos nx \tan \frac{x}{2} - \frac{(-1)^{n+1}}{2n} \int_0^x \frac{\cos nt}{\cos^2 \frac{t}{2}} dt \\
&\quad (n \in \mathbf{N})
\end{aligned}$$

が成り立ちます。これより、任意の $R \in (0, \pi)$ に対して、
 $(-\pi < -R \leq x \leq R < \pi)$ において

$$\begin{aligned}
 |S_{A_n}(x) - x| &= \left| \frac{(-1)^{n+1}}{n} \sin nx + \frac{(-1)^{n+1}}{n} \cos nx \tan \frac{x}{2} \right. \\
 &\quad \left. - \frac{(-1)^{n+1}}{2n} \int_0^x \frac{\cos nt}{\cos^2 \frac{t}{2}} dt \right| \\
 &\leq \frac{1}{n} |\sin nx| + \frac{1}{n} |\cos nx| \left| \tan \frac{x}{2} \right| + \frac{1}{2n} \left| \int_0^x \frac{|\cos nt|}{\left| \cos^2 \frac{t}{2} \right|} dt \right| \\
 &\leq \frac{1}{n} + \frac{1}{n} \tan \frac{R}{2} + \frac{1}{2n} \frac{R}{\cos^2 \frac{R}{2}} \\
 &\rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty)
 \end{aligned}$$

すなわち、 S_{A_n} は $(-\pi, \pi)$ 上、 f_A に広義一様収束します。

一方、 $S_{An}(\pm\pi) = 0$ ($n \in \mathbf{N}$) より、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} S_{An}(\pm\pi) = 0 \neq \pm\pi$$

なので、 S_{An} は $(-\pi, \pi)$ 上、各点収束はするものの、極限関数

$$\tilde{f}_A(x) = \begin{cases} f_A(x) & (x \neq m\pi) \\ 0 & (x = m\pi) \end{cases} \quad (m : \text{奇数})$$

は f_A と完全には一致せず、また、この \tilde{f}_A は不連続なので、連続関数列 S_{An} の \tilde{f}_A への収束は一様収束ではありません。

f_B を $f_B(x) = f_A(\pi - x)$ で定義すると、 f_B は

$$f_B(x) = \begin{cases} -\pi - x & (-\pi < x < 0) \\ \pi - x & (0 \leq x \leq \pi) \end{cases}$$

を周期 2π で \mathbf{R} 全体に拡張した関数になります。 f_B のフーリエ級数は、定義通りに計算する以外に、 f_A のフーリエ級数から、次のように求めることもできます。

$$\begin{aligned} S_{Bn}(x) &= S_{An}(\pi - x) \\ &= \sum_{k=1}^n \frac{2(-1)^{k+1}}{k} \sin k(\pi - x) \\ &= \sum_{k=1}^n \frac{2(-1)^{k+1}}{k} (-1)^{k+1} \sin kx \\ &= \sum_{k=1}^n \frac{2}{k} \sin kx \quad (n \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

これより、 f_B のフーリエ係数は、

$$a_k = 0 \quad (k \in \mathbf{N} \cup \{0\}), \quad b_k = \frac{2}{k} \quad (k \in \mathbf{N})$$

です。 S_{Bn} は $[-\pi, 0) \cup (0, \pi]$ 上、 f_B に広義一様収束します。

f_C を $f_C(x) = f_A(x) + f_B(x)$ で定義すると、 f_C は

$$f_C(x) = \begin{cases} -\pi & (-\pi < x < 0) \\ \pi & (0 \leq x \leq \pi) \end{cases}$$

を周期 2π で \mathbb{R} 全体に拡張した関数になります。 f_C のフーリエ級数も、定義通りに計算する以外に、 f_A と f_B のフーリエ級数から、次のように求めることができます。

$$\begin{aligned} S_{Cn}(x) &= S_{An}(x) + S_{Bn}(x) \\ &= \sum_{k=1}^n \frac{2\{(-1)^{k+1} + 1\}}{k} \sin kx \\ &= \sum_{k=1; k: \text{奇数}}^n \frac{4}{k} \sin kx \quad (n \in \mathbb{N}) \end{aligned}$$

これより、 f_C のフーリエ係数は、

$$a_k = 0 \quad (k \in \mathbf{N} \cup \{0\}), \quad b_k = \begin{cases} \frac{4}{k} & (k : \text{奇数}) \\ 0 & (k : \text{偶数}), \end{cases} \quad (k \in \mathbf{N})$$

です。 S_{C_n} は $(-\pi, 0) \cup (0, \pi)$ 上、 f_C に広義一様収束します。

f_D を $f_D(x) = f_C\left(x + \frac{\pi}{2}\right)$ で定義すると、 f_D は

$$f_D(x) = \begin{cases} -\pi & \left(-\pi < x < -\frac{\pi}{2}; \frac{\pi}{2} < x \leq \pi\right) \\ \pi & \left(-\frac{\pi}{2} \leq x \leq \frac{\pi}{2}\right) \end{cases}$$

を周期 2π で \mathbb{R} 全体に拡張した関数になります。 f_D のフーリエ級数も、定義通りに計算する以外に、 f_C のフーリエ級数から、次のように求めることができます。

$$\begin{aligned} S_{Dn}(x) &= S_{Cn}\left(x + \frac{\pi}{2}\right) \\ &= \sum_{k=1; k: \text{奇数}}^n \frac{4}{k} \sin k\left(x + \frac{\pi}{2}\right) \\ &= \sum_{k=1; k: \text{奇数}}^n \frac{4}{k} \cos kx \end{aligned}$$

これより、 f_D のフーリエ係数は、

$$a_k = \begin{cases} \frac{4}{k} & (k : \text{奇数}) \\ 0 & (k : \text{偶数}), \end{cases} \quad b_k = 0 \quad (k \in \mathbf{N})$$

です。 S_{Dn} は $\left[-\pi, -\frac{\pi}{2}\right) \cup \left(-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}\right) \cup \left(\frac{\pi}{2}, \pi\right]$ 上、 f_D に広義一様収束します。

f_E を $f_E(x) = \frac{1}{\pi} f_D(x)$ で定義すると、(f_E は例 1-1 の f です。)

$$\begin{aligned} S_{En}(x) &= \frac{1}{\pi} S_{Dn}(x) \\ &= \sum_{k=1; k: \text{奇数}}^n \frac{4}{k\pi} \cos kx \quad (n \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

より、 f_E のフーリエ係数は、

$$a_k = \begin{cases} \frac{4}{k\pi} & (k : \text{奇数}) \\ 0 & (k : \text{偶数}), \end{cases} \quad b_k = 0 \quad (k \in \mathbf{N})$$

です。 S_{En} は $\left[-\pi, -\frac{\pi}{2}\right) \cup \left(-\frac{\pi}{2}, \frac{\pi}{2}\right) \cup \left(\frac{\pi}{2}, \pi\right]$ 上、 f_E に広義一様収束します。

f_F を

$$f_F(x) = \frac{\pi}{2} + \frac{1}{\pi} \int_{(m+1/2)\pi}^x f_C(t) dt \quad (m\pi \leq x \leq (m+1)\pi; m \in \mathbf{Z})$$

で定義すると、

$$f_F(x) = |x| \quad (-\pi \leq x \leq \pi)$$

を周期 2π で \mathbf{R} 全体に拡張した関数になります。(f_F は例 1-2 の f です。) f_F のフーリエ級数も、定義通りに計算する以外に、 f_C のフーリエ級数から、次のように求めることができます。

$$\begin{aligned}
S_{F_n}(x) &= \frac{\pi}{2} + \frac{1}{\pi} \int_{(m+1/2)\pi}^x S_{C_n}(t) dt \\
&= \frac{\pi}{2} + \frac{1}{\pi} \int_{(m+1/2)\pi}^x \sum_{k=1; k:\text{奇数}}^n \frac{4}{k} \sin kt dt \\
&= \frac{\pi}{2} + \frac{1}{\pi} \sum_{k=1; k:\text{奇数}}^n \int_{(m+1/2)\pi}^x \frac{4}{k} \sin kt dt \\
&= \frac{\pi}{2} + \frac{1}{\pi} \sum_{k=1; k:\text{奇数}}^n \frac{4}{k^2} [-\cos kt]_{(m+1/2)\pi}^x \\
&= \frac{\pi}{2} + \frac{1}{\pi} \sum_{k=1; k:\text{奇数}}^n \frac{4}{k^2} \left\{ -\cos kx + \cos k \left(m + \frac{1}{2} \right) \pi \right\} \\
&= \frac{\pi}{2} + \sum_{k=1; k:\text{奇数}}^n \frac{-4}{k^2 \pi} \cos kx \quad (n \in \mathbf{N})
\end{aligned}$$

より、 f_F のフーリエ係数は、

$$a_0 = \pi, \quad a_k = \begin{cases} \frac{-4}{k^2\pi} & (k : \text{奇数}) \\ 0 & (k : \text{偶数}), \end{cases} \quad b_k = 0 \quad (k \in \mathbf{N})$$

です。 S_{F_n} が $(-\pi, 0) \cup (0, \pi)$ 上、 f_F に広義一様収束することは、ここまでの事実と定理 1-2 (の証明) からわかりますが、実はこの場合は $[-\pi, \pi]$ 上で、一様収束することが、後日紹介する一般論で示せます。

f_G は

$$f_G(x) = x^2 \quad (-\pi < x \leq \pi)$$

を周期 2π で \mathbb{R} 全体に拡張した関数とします。(教科書の練習問題 1,2(1)、例題 2-1 の f です。)

f_G は偶関数なので、

$$b_k = \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} x^2 \sin kx dx = 0 \quad (k \in \mathbb{N})$$

が成り立ち、 f_G のフーリエ級数はフーリエ余弦級数になります。

今、

$$\begin{aligned} a_0 &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} x^2 dx = \frac{1}{\pi} \left[\frac{x^3}{3} \right]_{-\pi}^{\pi} = \frac{2\pi^2}{3} \\ a_k &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} x^2 \cos kx dx \\ &= \frac{1}{\pi} \left\{ \left[x^2 \frac{\sin kx}{k} \right]_{-\pi}^{\pi} - \int_{-\pi}^{\pi} 2x \frac{\sin kx}{k} dx \right\} \\ &= \frac{1}{\pi} \int_{-\pi}^{\pi} 2x \frac{-\sin kx}{k} dx \\ &= \frac{1}{\pi} \left\{ \left[2x \frac{\cos kx}{k^2} \right]_{-\pi}^{\pi} - \int_{-\pi}^{\pi} 2 \frac{\cos kx}{k^2} dx \right\} \\ &= \frac{1}{\pi} \cdot 4\pi \frac{(-1)^k}{k^2} \\ &= \frac{4(-1)^k}{k^2} \quad (k \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

より、 L^2 近似を与える三角多項式は、

$$\begin{aligned} S_{G_n}(x) &= \frac{a_0}{2} + \sum_{k=1}^n a_k \cos kx \\ &= \frac{\pi^2}{3} + \sum_{k=1}^n \frac{4(-1)^k}{k^2} \cos kx \quad (n \in \mathbf{N}) \end{aligned}$$

です。

実は、この場合も、 S_{G_n} が $[-\pi, \pi]$ 上で f_G に一様収束することが、一般論で示せるので、特に $x = \pi$ ととれば、

$$\begin{aligned}\pi^2 &= f_G(\pi) = \lim_{n \rightarrow \infty} S_{G_n}(\pi) \\ &= \frac{\pi^2}{3} + \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4(-1)^k}{k^2} \cos k\pi \\ &= \frac{\pi^2}{3} + \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4}{k^2}\end{aligned}$$

より、

$$\frac{2\pi^2}{3} = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4}{k^2}$$

を得ます。

この等式の両辺に π をかければ、

$$\frac{2\pi^3}{3} = \pi \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4}{k^2}$$

で、これより、 f_A の S_{An} による L^2 近似の誤差 ϵ_n が、 $n \rightarrow \infty$ のとき 0 に収束する (すなわち S_{An} が f_A に L^2 収束する) ことがわかります。

この事実が、より一般の区分的に滑らかな関数 (定義は後に与えます) について、一周期の内に有限個の不連続点があっても、フーリエ級数が一様収束しない場合でも、 L^2 収束はしていることの根拠を与えます。

前頁で示した等式は、 S_F を用いても導くことができます。

実際、既に述べたように、 S_{F_n} が $[-\pi, \pi]$ 上で f_F に一様収束することが、一般論で示せるので、特に $x = 0$ ととれば、

$$\begin{aligned} 0 &= f_F(0) = \lim_{n \rightarrow \infty} S_{F_n}(0) \\ &= \frac{\pi}{2} + \sum_{k=1; k: \text{奇数}}^{\infty} \frac{-4}{k^2 \pi} \cos 0 \\ &= \frac{\pi}{2} - \sum_{k=1; k: \text{奇数}}^{\infty} \frac{4}{k^2 \pi} \end{aligned}$$

より、

$$\begin{aligned} \frac{\pi}{2} &= \sum_{k=1; k: \text{奇数}}^{\infty} \frac{4}{k^2 \pi} = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4}{k^2 \pi} - \sum_{k=1; k: \text{偶数}}^{\infty} \frac{4}{k^2 \pi} \\ &= \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4}{k^2 \pi} - \frac{1}{4} \sum_{k=1}^{\infty} \frac{4}{k^2 \pi} = \sum_{k=1}^{\infty} \frac{3}{k^2 \pi} \end{aligned}$$

を得ます。

この等式の両辺に $\frac{4\pi^2}{3}$ をかければ、前頁の等式が得られます。